

美術を苦手とする学生の苦手意識克服の為の試み

宮 越 敏 夫

Overcoming Students' Dislike of Art Class : A Trial Program Designed to Create Interest and Enjoyment.

Toshio Miyakoshi

1 はじめに

長年保育士、幼稚園教諭を育成する短大で美術を教えてきて思うことだが、意外と美術が苦手という学生が多いことである。そこで疑問に思うのは、はたして苦手意識を持つ学生が保育士や幼稚園教諭となって子どもたちに美術の楽しさを伝えられるだろうかということである。毎年、学生が外部の園で実習するとき、筆者は巡回に行くのだが、その折、園の中をよく見せて頂いている。教室一杯に子どもたちの活発で素晴らしい絵が描かれている場面がよくある。主に外に出て、動物園に行ったり、芋堀をした経験などを描いたものである。まず共通して園長先生方が云われるのはそのクラスの担任が率先して行動する先生であるということである。先生の熱意、感動が子どもたちにも伝わり、それが絵に表れるのだと思われる。そこでどうしたら、そうした教育者を育成できるかについて考察を試みることにした。

1 学生の意識について、アンケートの結果からの考察

まず学生の美術に対する意識をきちんと調べなければと思い、図画工作の最初の時間に約130名の学生に表1のアンケートを試みた。アンケートは個人情報が特定されないように留意し、回答は自由であることを説明して実施した。

アンケートの問1の結果をグラフにしたものが図1である。このグラフからわかることは予想していたことであるが不得意とする学生が半数近くいることである。これが普通の職業に就いてゆく人達ならば、何ら問題ないであろうが、保育士等になってゆくとすると、苦手意識のこどもを再生産してしまうのではないだろうかと危惧するのである。こうした学生の意識をサーカスの象に例えてみた。象は小さな頃から鎖に繋がれ、最初の頃は逃げようと何回も試みたであろうが、まだ力も弱かったため、杭を抜くことができず、いつしか逃げられないと思いこみ、大きくなっても小さな杭1本で逃げないという。こうした思い込み、刷り込みは人間も同じように持つものだと思う。そうした思い込みを消すということは難しい事かもしれない。問1のアンケートの結果について考えて見たい。美術を得意とした8パーセントの学生の理由のうち、約50パーセントが絵を描くのが好き、40パーセントが絵を描くのが楽しいとしている。逆に美術が不得意とした学生の31パーセントが絵を描くのが苦手。28パーセントがセン

表 1

美術に関するアンケート		
(該当する箇所に○、又は文を書いて下さい。)		
問 1、あなたは美術について どう 思っていますか。		
イ、得意	・その理由は (任意))
ロ、どちらでもない	〃 (任意))
ハ、不得意	〃 (任意))
問 2、あなたの中学時代の美術の成績はどうでしたか。		
イ、良い	・思い当たる理由 (任意))
ロ、普通	〃 (任意))
ハ、悪い	〃 (任意))
問 3、あなたはこの図画工作の授業をどう思っていますか。		
(期待するものがありますか。)		
イ、ある	・思い当たる理由 (任意))
ロ、どちらでもない	〃 (任意))
ハ、ない	〃 (任意))
問 4、あなたは保育士又は幼稚園教諭になったとき子供たちに		
どのような美術教育をしたいと思いますか。		
(任意「考えのある人」)		

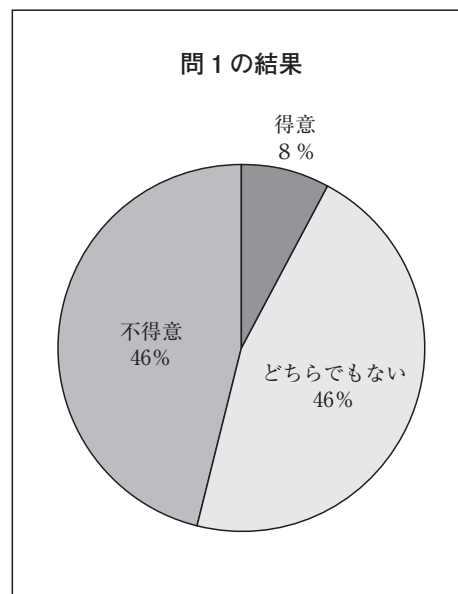


図 1

ス、絵心、発想力がない。26パーセントが不器用だとしている。この美術が苦手という理由をみると美術が得意、不得意は極めて主観的なもので、自身の思い込み、という印象を受ける。

そこで自身にそう思い込ませたものは何か、そのことについて考えてみたい。問2の「中学時代の美術の成績はどうでしたか」という質問に対する回答から、不得意と思い込ませたものが見えてくるように思われる。苦手の理由で中学の美術の成績が悪かったからと、はっきり示している学生はいないのだが、中学の成績が悪かったと答えている学生の全員が美術が不得意と答えている。それと共に美術の成績が悪かった学生で今、美術が得意という学生も一人もいない。

学生にとって美術の苦手意識に中学の美術の成績が客観的烙印ともいうべきものを押した形になっているのではないと思われる。このようにして形成された美術の苦手意識は容易なことでは克服できないように思われる。ところが必ずしも、そうとは決めつけられないようにも思われる。ここであるケースを紹介したいと思う

4年前の卒業生で現在は幼稚園教諭として頑張っている人であるが、彼は学生の頃、美術は苦手だと述べていた。ところが美術の授業では彼の毎回描く作品は、決して派手な色を使ったり、目立つ作品ではないのだが、品があり、深みもあり、素晴らしい作品なのである。無論、文句無く優の評価であった。その後、彼が学校に訪ねて来た時、当時のことを質問してみた。「君の当時の美術に対する意識と作品から感じていた私の印象とのギャップは何なのだろうか。」と。すると彼は「当時はそのギャップについて説明できなかったが、今は言えます。」と語った。「私は今でも美術は苦手です。今でも物をきちんとうまく描くことはできません。ところが当時は描いてみて、ああ！こういうやり方なら自分にもできる、そんな思いを持って取り組んだので、そのような作品になったのではないのでしょうか。」とも語った。筆者は改めて、この卒業生の言葉から筆者のやろうとしていることに一定の確信を持った。

当時から行っていた題材は保育園、幼稚園でやる「デカルコマニー」「ストリングデザイン」「スクラッチ」「たらし絵」等である。つまり、デッサン力、描写力を必要とするものではなく、表現といったものである。

多くの美術評論家や画家が述べていることであるが、保育園、幼稚園から小学校1、2年位までの子供はどの子も「絵の天才」だということである。この頃はまだ描写力などは無く、そうした表現活動しか出来ないという理由もある。小学校3、4年生頃から観察力や描写力が付いて来る。いわゆるデッサン力である。そこでデッサン力をきちんと付けた子が絵がうまい子として認められ、本人の自信にも繋がる。ところがそれに対し、デッサン力を思うように付けられなかった子がうまくない子とされ、苦手意識に繋がってゆくのではないかと思われる。

筆者は絵にデッサン力は必要ないと思っている。保育園、幼稚園時代に行った自然、偶然を利用する原点に戻って、そこからそれらの応用の絵を作ることで美術の苦手意識を克服できないかと思うのである。図2、3、4、5は学生が試みた作品である。テーマは「墨を垂らした『たらし絵』に何かを付け足して絵を完成させなさい。」というものである。



図2



図3



図4

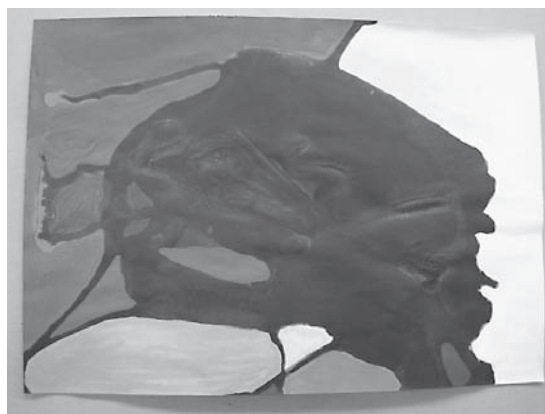


図5

図2は題名は「逃走」で、制作者は「私が今逃げだしたいことをイメージして、自由に見ようと思えば見えるようにしました。」と制作意図を書いている。垂らした墨の模様を、うまく自分の気持ちに結び付けている。又カラーの色は少ないのだが墨の黒い効果を損なわないように効果的に用いて、美しい作品になっている。図3は題名は無いのだが墨の模様を蝶の体に見立て、目や口を配置して不気味な幻想世界を生み出している。作者は「墨絵を何に見立てるか、とても迷いました。」と感想を書いている。図4は題名は無いのだが「今日の作品は夕焼けがそろそろ沈んで、星が出てくる頃の紅葉の終わる木をイメージしました。夕方の木はあたりがまだ少し明るく、木は黒く見えるところを生かして描きま

した。」と書いている。偶然に出来た模様を如何に解釈するか、想像力を活かして取り組んでいる様子が感じられる。図5は「幼稚園児と同じことをやっている」と聞いて、納得しました。どこか懐かしかったからです。それと楽しい気持ちになったこと。色塗りの前は、何を描いていこうかという気持ちだったけど、描いていくうちに、あっ！と閃いたので、すごいと思った。以前見た女性の画家さんの描き方（授業のビデオ）を真似できたし、楽しかった。今度の授業も楽しみです。」と書いている。この作品は垂らした墨の強さを活かすためにカラフルな色との対比を試みている。あざやかで強い作品となっている。こうして出来た作品の感想ではどの学生も応用の難しさを述べているのであるが、様々な発想が見られ、興味深い作品群となっている。

授業の終わりに学生たちが授業をどのようにとらえたか、それを知る為に再びアンケートを試みたそれが表2である。

表2

美術に関するアンケート2 (該当する箇所には○、又は文を書いて下さい。)	
問1、あなたはこの図工の授業を受けて、どう思っていますか。(○を付けて下さい)	
イ、得意 だったに○を付けた人 (イ、不得意になった。ロ、変わらない。ハ、さらに得意になった。)	
ロ、どちらでもないに○を付けた人 (イ、不得意になった。ロ、変わらない。ハ、得意になった。)	
ハ、不得意に○を付けた人 (イ、さらに不得意になった。ロ、変わらない。ハ、得意になった。)	
問2、あなたはこの図画工作の授業をどう思っていますか。(期待するものがありますかとの質問に対して)	
イ、あるに○を付けた人	結果 (イ、あった。ロ、無かった。)
ロ、どちらでもないに○を付けた人	結果 (イ、あった。ロ、無かった。ハ、どちらでもなかった。)
ハ、ないに○を付けた人	結果 (イ、あった。ロ、無かった。)
問3、この授業について書きたいことがあったら書いて下さい。(任意)	

アンケート2の問1の結果をグラフに表したものが図6と図7である。

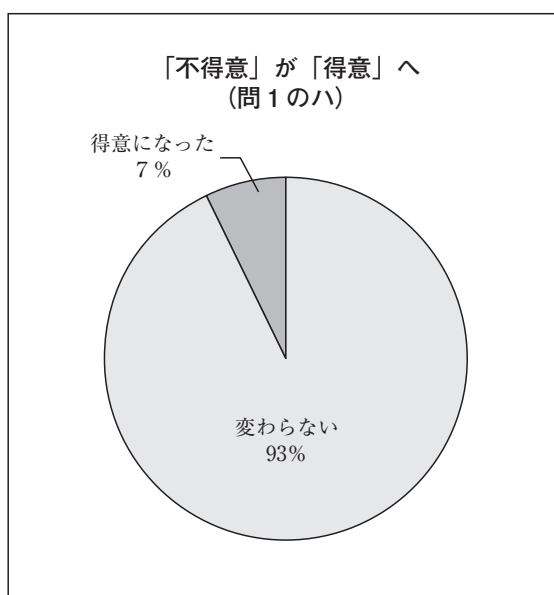


図6

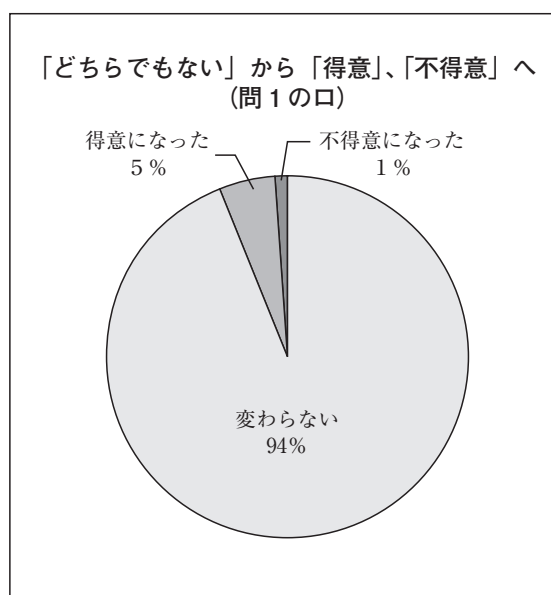


図7

このアンケートの結果で見ると、学生の美術への苦手意識はほとんど変わらないといえる。まったく紹介した卒業生の一人の意識と同じだともいえる。では授業の効果が全くなかったのかというとそうでもないと思われる。それはアンケート2の間4で「この授業で書きたいことがあったら書いて下さい。」との問いに対して感想を書いてくれたものを纏めたものが次の図8である。

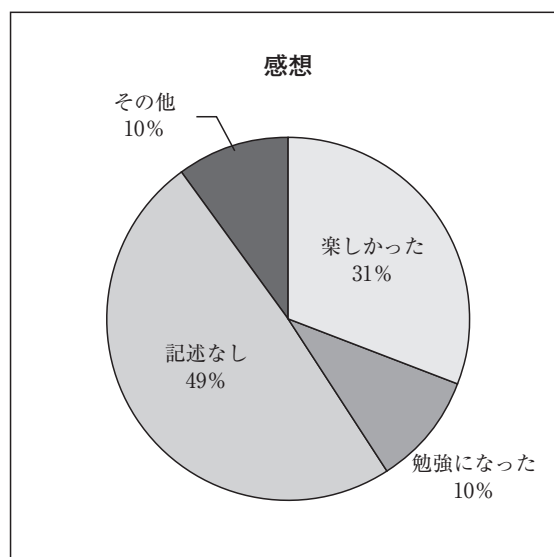


図8

書いてくれた学生の多くが楽しかった、と書いているのである。そう多くの学生が書いたのには理由がある。それは授業の初めに筆者が話した話を受けての感想でもある。その話とは明治時代の話である。明治時代に「ファインアート」という言葉が日本に入ってきたが、その概念を示す言葉が無く、訳者は大変苦労したという。苦肉の策として、「美術」と訳したのだという。筆者は本来のファインアートの意味からすれば「生術」とか「元気術」と訳すべきではなかったか、と話し、美術の本来の目的はうまく描くことではなく、「楽しむことが大事」とも話していた。学生の感想はそれを受けてのものである。

おわりに

授業を通して改めて、学生の美術への苦手意識を変えることの難しさを再確認した。そして又自然偶然にできる面白さ、いわゆる自然の美の応用というものも学生にとってはなかなか難しいものだということを確認した。ただ、筆者の「ファインアート」という美術の原点の言葉に戻って「美術は上手下手ではなく、楽しむことが一番大事」というメッセージだけは多くの学生が受け取ってくれたのではないかと思う。今後もこの取り組みを続けたいと思っている。